

## 2021年度 松山大学 経済学部入学試験【指定校推薦型選抜】

### ◆小論文◆ (60分、600字程度)

現在、複数の大学において、インターネットを用いたオンライン講義(遠隔講義)が、様々な形で実施されています。一例を挙げると、学生は自宅からパソコンやスマートフォンを用いてオンラインで講義に参加、講義中はチャットやアンケート機能などを利用して授業内容に関する質問や回答を教員に送信、教員はリアルタイムでそれらを把握してモニター越しに説明や返答をおこなう…といった講義風景が展開されています。こうしたオンライン講義を実際に体験した記者の手による以下の新聞記事を、必要に応じて参考にしながら、次の問いに答えなさい。

【問い】今後、コロナウイルスの脅威が完全におさまり、従来通りの教室でおこなう講義(対面講義)が全面的に可能になったと仮定します。**その場合、あなたは、かつてのように対面講義をおこなうべきだと思いますか。それとも、オンライン講義を続けるべきだと思いますか。あるいは、両者を何らかの形でミックスして講義をおこなうべきだと思いますか。**現行のオンライン講義が、学生や教員にもたらしている様々な「利点」または「欠点」を考えてみた上で、あなたの意見を600字程度で述べなさい。

なお、以下の新聞記事内で言及されている福岡女子大学の講義例に限定することなく、広く一般的にオンライン講義の実情を考えてみた上で、学生あるいは教員にとっての様々な「利点」(例えば、「自宅で受講できるので、わざわざ大学に行かなくて済む」など)、または「欠点」(例えば、「自宅から受講するので、他の受講生や先生に会う機会がなくなる」など)に触れながら、あなたの意見を述べても全く差し支えありません。

---

「オンライン講義の長所&短所は? 福岡女子大で記者が体験してみた」

新型コロナウイルス予防のため、各大学では実習など一部を除いてオンラインでの講義が続けられている所も多い。大学が、学生の受信環境整備を経済的に支援し、教員はオンライン用に新たに教材を作るなど模索が続く。4学期制で、現在2学期途中の福岡女子大(福岡市東区)の講義を体験させてもらい、オンラインのメリット、デメリットなどを探った。

取材した科目は同大国際文理学部の基礎科目「国際社会における食の安全・安心」。受講人数は100人近く、通常ならば大教室での授業になる。参加したのは6月末、学期最初の授業だった。

担当する小林弘司准教授は机にパソコンと大型モニター、撮影用のカメラをセット。準備した教材資料を画面上で共有するが、生の授業では板書もやはり必要なので、背後にホワイトボードも用意していた。

オンライン会議システムで学生たちの顔がそろい、授業開始。自宅で受講する学生が多いが、学内の学生寮で勉強を続けている留学生の姿もある。

同大では科目の最初の授業で教員と学生が授業内容を話し合い、方向性を決めるのが慣例だという。小林准教授はまず、「どんなことを学べると考えてこの科目を履修したのか」と問い掛け。学生たちの回答を画面上に表示させ、確認した。「食物細菌と健康について学びたい」「飲食バイトをしているので食の安全安心が気になる」「衛生管理の仕方、日本と他国との違い」…。

続いて質問する。「日本の現代の食生活で、健康への影響に気を付けなくてはと考える項目は」。「アレルギー」「食品添加物」「病原微生物」などの答えが上位に並んだ。回答が瞬時に集約されて多い順に並ぶのは、オンラインならではの強みだろう。

小林准教授はこの後も問い掛けと回答集約を続けた後、「日本では食品添加物や残留農薬を怖がる割に、サプリメントや健康食品にあまり不安を抱かない傾向が高い」と指摘。「リスク評価を踏まえて考え、『正しく怖がること』を身に付けてほしい」と講義の目標地点へ導いた。

「大教室での講義だと数人に意見を聞いて終わることが多いが、オンラインだと全員の意見を聞き、傾向をリアルで見られるのがいい」と小林准教授。対面講義が再開しても、スマートフォンを使った双方向授業をしようかと考えている。

一方、画面越しにしか会えない学生一人一人の理解度の把握や、試験をどう行うかなど、初めての事態に戸惑うことも多い。

質を落とさずにどう講義を進めるか。学生たちの感想を読み返信しながら、次の講義の構想を立てる。（今井知可子）

出典：「オンライン講義 模索続く」西日本新聞 2020年7月28日